

■2023年10月29日(日)開催 学校と社会をどこまでつなげるか～10年調査から考える課題～参加者ご質問への登壇者回答

No	ご質問の内容	登壇者からの回答
01	トランジション実現のために、重要となる「中高での探究」と「大学入学者選抜」を効果的につなげるために、必要な施策はどのようなことでしょうか？または、現在の「大学入学者選抜」では、大幅に不足していることはどのようなことでしょうか？ (大学教職員の方)	溝上慎一氏 中高での「探究」、アクティブラーニングを始め、現行の学習指導要領で求められる学習活動は、大学、仕事・社会へのトランジションのために取り組まれているものであって、「大学入試」に向けたものではないと私は考えています。大学入試は高校生にとっての社会的お務めですので、分けて考えます。
02	高校までの資質や能力が大切であることは溝上先生の研究からもよくわかりました。一方、それを支える教師は専門教科以外に必要なスキルを求められすぎ、明らかに業務や能力をオーバーしています。生徒も先生も学力ではなく「学習力」を向上させるため教育行政が講じる施策はありますか？ (教育委員会・教育センターの方)	溝上慎一氏 この問題は、児童・生徒の学習パラダイム（指導要領では「（教師が）何を教えるか」ではなく「（生徒が）何ができるようになるか」と記載されています）に基づく授業や指導に、教員がどのように転換していくか、それができるようになるかにあります。 教育行政が講じる取り組みとしては、重点校を選定して県や市区町村の学校のモデル的实践を作り見せていく、公開研究授業などをもとに教員研修を重ねていく、という実践を地道に積み重ねていくしかないと思います。この問題は、学校教育だけではありません。企業も一般行政も同じです。教員にとってオーバーロードでも、転換への工夫、打開を粘り強く考えて、見つけて、取り組んでいくしかないと思います。転換できない教員や学校、職員はこの先仕事がないくらいに覚悟して取り組む必要があると思います。 内堀繁利氏 「学力」とは「学んだ力」と「学ぶ力」の総体であると考えられると思います。ますます変化が激しく正解が一つとは限らなくなっていくこれからの時代にあっては、学ぶことそのものに喜びを感じ、生涯にわたって学び続けることがますます重要になっています。 主体的に学ぶ力を育成するためには、①自分の意志で、「やらねばならないこと」ではなく「やりたいこと」が十分にできること、②多様な他者と共に学び、他者の学ぶ姿に学ぶこと、などが大切であり、教育行政が行うべきこととしては、学校とともに、生徒に対しても教員に対しても、そのための環境づくりをしていくことだと考えます。

■2023年10月29日(日)開催 学校と社会をどこまでつなげるか～10年調査から考える課題～参加者ご質問への登壇者回答

No	ご質問の内容	登壇者からの回答
03	PBLのような実践型の探究と、学問的研究的な探究におけるアクティブラーニング外化で、身に付く資質・能力やその後のキャリア選択への影響の違い等はあるのでしょうか。 (教育委員会・教育センターの方)	溝上慎一氏 高校の「総合的な探究の時間」としての探究（「総合的な探究」としておきます）と学術的な「研究」（これを探究と称している学校は少なからずあります）とは、重なるところが多くありながらも、大きな違いがあり、私は高校生の間は「総合的な探究」をしっかりとってほしいと説いています。「研究」（高校での大学版ミニ研究も含めて）では、新規性やオリジナリティ、データ処理、統計の作法が高度に求められます。世の中でデータサイエンスの必要性、教科情報（とくにII）、タブレット内のPythonのアプリが充実する中で、高度な数学計算や統計処理にあまりに多くの時間を費やして「研究」をさせている高校の取り組みを、残念に思いながら見えています。この話における数学の知識や統計的な技術的なことは、大学に入ってからでも短い期間で習得することができます。高校生の間には、指導要領で説かれるような、身近な生活や経験から来る問いや疑問を大事にして、「総合的な探究」をしてほしいと思います。データ収集や実験の仕方、統計処理等は学術的な水準に達しているものの、内容がつまらないミニ「研究」を最近よく見えて、がっかりしています。 先日、桐蔭学園での高校生の探究の発表会がありました。いいなと思った生徒の探究課題を1つ紹介します。宮崎駿のアニメ作品に「天空の城 ラピュタ」がありますが、その中の大風が吹くワンシーンに着目し、主人公の飛ばされ方や木の揺らぎ方などから、その風の速度を計測したというものです。この生徒は「どんな文献やネットを見ても全く載っておらず、そこが一番苦労した」と言っていました。大学レベルであれば、課題設定自体が間違っていると一笑に付されてしまう課題ですが、私はこういう探究をしてほしいと思いました。桐蔭学園では、まさにこういう身近なところから疑問や問いを発する、深める探究をめざしています。

■2023年10月29日(日)開催 学校と社会をどこまでつなげるか～10年調査から考える課題～参加者ご質問への登壇者回答

No	ご質問の内容	登壇者からの回答
04	溝上先生の問題定義はもっともだと思います。一方で、濱中先生が問題提議されたように、外部と繋がることで別の学校の負担は大きくなります。また入試の多様化も面接指導など負担を大きくする追い討ちになっています。ICT然り、現場は悲鳴をあげています。このままでは定年後の非常勤講師すらいなくなりそうです。若者を育てるために求められてる学校教育と教員の負担軽減をどのように両立していけばいいのでしょうか。 (高校・中等教育学校教職員の方)	溝上慎一氏 私はそれでも結局は転換に向けて取り組むしかないのだろうと思っています。現行の学習指導要領では求めることが多すぎるので（しかしそれもまた現代の特徴で、決して否定的には述べていません）、学校教育目標に照らしてカリキュラム、教育/学習活動を厳選すること、優先順位をつけること、そうして教員のワークロードを下げて教員にもっと自由な時間をあげること。この取り組みを教育委員会や学校が組織的に進めていかないといけないと思います。 私の提案で覚えておいてほしいのは、どうせ学校が貪欲にいろいろ取り組んでも、社会が求める育成課題にすべて取り組むことはもはや不可能な状態にまで達していること。その意味で、取り組めていない課題について、生徒が自身の関心や必要性に応じて自分で補っていく力を育てることが、現代社会での学校教育の新たな役割であるということです。学習パラダイムへの転換の究極的な意義はここにあると思います。
05	小中高のつながり、発達段階の分担について (教育委員会・教育センターの方) 社会の中で、それぞれの人間が必要とされる能力は異なります。社会全体の中で、どれぐらいの割合の人にどのような能力が必要があるのか、そのような観点が必要ではないでしょうか。 (元大学教員の方)	溝上慎一氏 前項で述べたように、学校教育で社会が求めるさまざまな知識、資質・能力、態度等を十分に教えることはできなくなっています。「基礎的なもの」と限定しても、それさえ十分に教えられない状況に来ているのが現代です。その意味では、優先順位を付けてカリキュラムを「厳選」することが、とくに義務教育で求められていると思います。私は、ここから先の指導要領の議論の最大の焦点は義務教育（小学校・中学校）で、十分ではなくても、厳選してこれだけは教えておく、育てておく、という議論になるとみています。ですから、高校、大学では、その発展、高まる専門性というくらいの意味合いしかなく、足りない部分は生徒・学生が自分たちで学校以外の学習で補っていく必要があります。 あと2つ目の質問についてですが。一般的には、将来生徒がどのような仕事や社会に出て行くかが学校ではわからないわけですし、たとえそれを見定めたとしても、10年経ったらすっかり社会の様相、学校との接続は大きく変わっているわけですから、「どれぐらいの割合の人にどのような能力が必要があるのか」を考えることは現実的ではないと思います。他方で、専門性の高い学部やコースにおいて、特定技能や態度を育てるという考えは、これまでもありました。それはそれで継承していけばいいと思います。

■2023年10月29日(日)開催 学校と社会をどこまでつなげるか～10年調査から考える課題～参加者ご質問への登壇者回答

No	ご質問の内容	登壇者からの回答
06	10年という期間での調査、まとめ、お疲れ様でした。さらに年数を重ねての調査が必要とのお話があったように思います。事例から考えてどれくらいの調査年数が必要とお考えでしょうか？ また、長年にわたる調査について、これまでの大学等での類似（先行）研究から考えて、その実用性（実効性）はどのように評価されるでしょうか？ (高校・中等教育学校教職員の方) 調査を今後も続けていくとすると、結果はどう変わるか、変わらないか。 (新聞記者の方)	溝上慎一氏 まずは、このような縦断調査を、国や大きな教育機関が実施していくことが最も重要だと思います。 資質・能力が高校生から大学生、社会人にかけて大化けしないというのは、発達心理学の膨大な知見からも傍証される結果であり、この研究データからだけで導かれたものではありません。小さなものですが、これまでのデータ、実践経験的な見方にも一致しています。しかし、それを検証していく、批判的に見ていく私たち以外の第三者がこの作業にもっと参入していかないと、社会にとってよい作業になりません。今いちばん求められるのはそこだと思います。 今回のプロジェクトから導いた大きな視点の1つは、「間接効果」です。常識的に考えて、高校・大学教育の効果を議論できるのは、卒後3～5年だと思います。それは理論的にも議論がありますし、今回の調査結果からも実証的に示されました。ここを踏まえるならば、今後の調査は高校からの卒業生調査、大学からの卒業生調査だと思います。卒業後3年くらいを目安に調査を行い、在学時の個票とマージした分析をすることです。桐蔭学園では、この作業を5、6年行っており、在学時の教育的取り組み、卒業生の質をアセスメントしています。
07	多様な探究活動があるなかで、生徒の成長度を図る手法はあるのか？ある種学校側の自己満足に陥らないための客観的評価する手法についてお聞きしたい。 (高校・中等教育学校教職員の方)	五十棲浩二氏 いくつかの企業で、探究的な学びの評価に取り組んでいます。客観的な評価の在り方は、引き続き検討していく必要があると考えています。
08	教育産業室には文科省や教委からの人も多いとのことですが、住む世界が異なるので活発な議論にはなっていないと推測します。高校2年までが重要との話もありますので文科省の産業教育振興室と一体となって（進学の有無に係わらず）産業人材育成を推進することはできないでしょうか。 (高校・中等教育学校教職員の方)	五十棲浩二氏 室内での議論は出自を問わずフラットに、かつ活発に行われています。産業人材育成は大事なテーマと考えているところですが、そのためにも学内外を含めた多様な学びの選択肢がある環境の整備が必要だと考えています。
09	教育行政としては文部科学省が中心だと思っているのですが、経済産業省が教育行政に係る際に、文部科学省との連携や方針のすり合わせなどはどのような形で行われているのでしょうか。 (大学教職員の方)	五十棲浩二氏 文科省担当部局とはさまざまなレベルで協働しており、意見交換も不断に行っているところです。

■2023年10月29日(日)開催 学校と社会をどこまでつなげるか～10年調査から考える課題～参加者ご質問への登壇者回答

No	ご質問の内容	登壇者からの回答
10	外部リソースを各校で共有するなどは、納得できますが、濱中先生の言うように、実現にはかなりハードルがあるので、先進的な実践例があれば聞いてみたい (企業の方)	五十棲浩二氏 すでに、オンライン不登校支援、越境留学など、外部リソースの共有が進んでいる分野もありますが、まだまだ学校間でのリソース共有は少ないため、引き続き実証等に取り組んでまいります。
11	お話に出てきた構想は、現在どの程度進んでいると感じていらっしゃるか。注目している具体例等はあるか。 (個人事業主の方)	五十棲浩二氏 現在、実証事業でも学内外のリソースを活用した学びの在り方を実証中です。また、ふるさと納税などを活用し、資源確保に成功している自治体も複数存在しています。 (https://www.learning-innovation.go.jp/)
12	1つの教員、1つの学校では抱えきれない課題を解決するためのプラットフォームづくり、とても興味深かったです。その担当、コーディネーターは誰が担っていますか？ (高校・中等教育学校教職員の方)	内堀繁利氏 ありがとうございます。おっしゃるように、これらは一部を除き、私学も含めた県内のどの高校の生徒であっても「手上げ方式」により参加が可能なものであり、県教委がさまざまな形で主催しているものと、県教委以外の機関等が県教委と連携を取りながら主催しているものがあります。 例えば、信州つばさ（留学）プロジェクトは生徒委員会を設置しながら県教委の単独主催、マイプロ関係は県教委主催でNPOに業務を委託、生徒主体性合宿は生徒実行委員会を設け県教委が県高校長会と共催、JIBUN発旅するラボは長野県立大学・県中小企業家同友会と県教委、KDDIとの共催、大学の先取り履修は大学が実施、信州ベンチャーコンテストは知事部局が主催、といった具合です。

■2023年10月29日(日)開催 学校と社会をどこまでつなげるか～10年調査から考える課題～参加者ご質問への登壇者回答

No	ご質問の内容	登壇者からの回答
13	①教育振興基本計画を、現場にどのように落とし込んでいるのか？ 現場で、新しい動き、先生方のマインドの変化は見られるのか？ ②また、管理職にはどのような指導（指示）を行っているのか？ (高校・中等教育学校教職員の方) 長野県での改革が良い方向へ向かっている中で教員の意識改革はどのように進められているのか。何が意識改革に影響しているのか。 (高校・中等教育学校教職員の方)	内堀繁利氏 長野県の高校改革は、今般の学習指導要領の改訂を待たずに、SSHやSGHなどの文科省指定校や経産省「未来の教室」指定校などを中心とした探究的な学びをはじめとする実践と他校への普及を通じて、以前から県内に広がっていました。今回策定した教育振興基本計画は、このような、以前からの考え方や方向性、取組も取り入れたものになっています。各校では、県内外の先進校視察、校内授業互見や全県・校内研修会、公開授業などを通じて改革を進め、それに伴って教員の意識も変化してきました。 加えて、改革が進む大きな要因になったのが、生徒の変容・成長です。議論だけでは平行線になることも多いと思いますが、総合や各教科における探究的な学びの導入・実践が、学力や学ぶ意欲の向上、生徒の生き生きとした姿につながっていることを実際に見て、改革の意義や妥当性を納得した教員が多くいたと思います。教員は、その多くが、生徒のためにと考え、日々を過ごしています。管理職も同じです。懐疑的な人もいたと思いますが、県教委からの講話、先進校視察や著名な方の講演、講師を囲んでの懇親会といった場での学びに加え、県内他校の改革が学校の活性化や関係者の評価、志願者の増加などにつながっていることを認識することで、改革に積極的に取り組む管理職も増えていったように思います。
14	公立進学校の多くは膨大な自宅課題を学校もあり、まさに今を我慢させる教育といえるのではないかと思います。所謂、トップ校ほど。しかし、そういった学校にこそ、未来の官僚になっていくような生徒達もいます。この現状は致し方ないのでしょうか。 (その他の方)	内堀繁利氏 どうでしょう。「大学受験」と言った時にいまだ多くの人がイメージするような、大量の知識を詰め込み、それを素早くかつ正確にアウトプットできるよう訓練することに特化した「勉強」を3年間朝から晩まで行っているような高校は、今やあまり存在しないのではないかと考えていますが、そういう高校があるとして、そういう高校では、現在、あるいはこれからの時代に「個人と社会のウェルビーイング」を実現していくために必要な力やメンタリティーは育ちにくいのではないかと思います。それは、「受験突破」だけが高校の学びの目的と化しているからであり、受験を突破すれば目的を失ってしまうからです。また、表層的な個々の知識は風化しやすいからです。 全国的に見て、四年制大学進学希望者がほぼ全員というような高校でも、もちろん学校や担任、生徒によってグラデーションはあるものの、探究や、理解の深化・社会課題解決などに向けた対話や討論などが日常的に行われ、自分の幸福を実現したりよりよい社会を創造したりする当事者としての意識が育っていると考えており、その意味では大いに期待したいと思っています。

■2023年10月29日(日)開催 学校と社会をどこまでつなげるか～10年調査から考える課題～参加者ご質問への登壇者回答

No	ご質問の内容	登壇者からの回答
15	内堀教育長様は、元高校の教員とのことでしたので、高校教育における「共通性」と「多様性」のあり方についてお尋ねしたいと思います。普通科高校の改革も取りざたされていますが、専門高校等を含めて、義務教育段階の小・中学校とは異なる高校段階の教育の思春期後半から青年期前期の子ども・若者にとっての高校教育の意義、その際に大事にされたいと考えられる「共通性」と「多様性」についてどのようにお考えであるか、お聞きしたいです。 (大学教職員の方) 同質性ではなく、多様性。適応ではなく、創造。競争ではなく、共創。大賛成です。しかし、現状を見ると、大人も子どもも、当たり前のこと、最低限のことができなくなっていて、あり得ないミスや不祥事、事故が多いのではないかと危惧しています。共通の基礎基本をあらためて重視するべきではないでしょうか。「好き」「楽しい」「なぜ」、昔（私にとっての）は勝手にそうしていました。一方的な一斉授業、管理主義教育に関係なく。私は「ワクワク」の「探究」に振れ過ぎではないかと思うのですが、いかがでしょうか。 (その他の方)	内堀繁利氏 「基礎基本」や「共通性」は重要だと考えますが、その学び方、身につけ方については、議論の余地があると思います。反復や訓練によって身につけることもあると思いますが、それが成立するためには学習者のモチベーションが必要です。「学習者は教えたようには学ばない」からです。 子どもたちが自由に使える時間に、あるいは我々が社会に出てから実際に、どのように学んでいるのか考えてみましょう。目標や目的を達成するために、あるいは「好き」や「楽しい」「なぜ」を追求する過程で、必要な知識やスキルを身につけているのではないのでしょうか。事実上義務教育化し、卒業時に進学か就職かという人生の一回目の大きな選択をする高校という場においても、その様な学びの方が自然だと思います（講演で触れた「学習観」）。 もちろん、全部をすぐにそのようにするというのは現実的ではありませんので、そういう割合を徐々に増やしていくということかと思います。「基礎基本と探究」「共通性と多様性」は相反するものでも、二者択一でもなく、重なったり、往還したりしながら、両立するものであると考えています。

■2023年10月29日(日)開催 学校と社会をどこまでつなげるか～10年調査から考える課題～参加者ご質問への登壇者回答

No	ご質問の内容	登壇者からの回答
16	未来とは希望とおっしゃられた現状認識について (高校・中等教育学校教職員の方)	内堀繁利氏 おっしゃるとおり、教育は未来を創る営みであり、未来とは希望であると考えています。さらに言えば、未来とは、希望であると同時に未来を生きる子どもたちへの期待でもあると思っています。 村上龍さんの『希望の国のエクソダス』という小説の中で、社会に対して反乱を起こした中学生が「この国には何でもあるが、希望だけがない」と語る場面があります。この小説はだいたい前に出版され、近未来を予想したものだったのですが、実際に、今の日本や世界の状況は、それに近いものがあるのではないかと思います。 過去何度も、閉塞感で満たされ危機に直面した時代を過ごしてきた人類ですが、その都度、教育（学び）とそれによって身につけた力や技術、知恵で、乗り越えてきました。今また、これまで人類が一度も直面したことのない時代を迎えています。子どもも大人も、今回も教育（学び）の力で乗り越えていけるとか、自分たちが創る未来はきっとよくなると思えること、大人たちが、未来は子どもたちに託せば大丈夫だと思えること、そういうことが希望なのだと思います。
17	大変興味深く拝見しました。溝上先生がご提示された図「資質・能力の変化」について、高校時代のディスポジション（性向、例えば、目標設定の仕方といった高校時代のアスピレーション）が大学生の資質・能力に及ぼす影響について、ご意見を伺えれば幸いです。 (大学教職員の方)	濱中淳子氏 現在、私自身の科学研究費補助金のプロジェクトとして、質的調査による大学生の成長の分析に取り組んでおりますが、浮き彫りになったことのひとつに、「学業面」での成功体験（もしくはやりきったという自信）の有無が、大学4年間の過ごし方に大きな影響を与えているという点があります。成功体験もしくは自信がないなかで、大学時代に学びに関する機会に対して積極的になることはかなり難しいということなのかもしれません。性向も大事だと思いますが、以上の体験の意義をここでは指摘しておきたいと思います。